

## 8月に思いを馳せながら



社団法人関西経済同友会 代表幹事

小嶋 淳司

本年是北京オリンピックの年であります。夏の大会としてアジアで3回目となるこの五輪は、日本、韓国に続いていよいよ中国が、豊かさゆとりを持つ国へと脱皮する過程に入ったことを示すものになると思います。

すでに変化の兆候は現れており、大阪や京都の観光地やホテルのロビーには、そこかしこで中国語が飛び交うようになりました。それでも、中国からわが国への入国者数は昨年114万人で、これは13億人と言われる中国人口のたった0.09%に過ぎません。今後、中国が一段と豊かになるにつれ、わが国への来訪者は急速に増えていくことになりましょう。私は、そのきっかけのひとつが、今年の北京オリンピックであるとの予感がしております。

観光ビッグバンが起こった時、わが国は対処出来るでしょうか。

それが気掛かりであります。

例えば、現状のまま、来訪者がリピーターになってくれるでしょうか。また、一箇所だけでなく様々なところを回りたいという観光客のニーズに十分応えられるように、受け入れ側の連携が出来ているでしょうか。これらの点を考えると、やるべきことがまだまだあるような気がいたします。

関西国際空港は、今、眼前の目標として、発着回数の確保という課題を課せられています。大変ご苦労されておられるところではありますが、関空会社の頑張りに、アジアの発展という

フォローの風が合わさったならば、13万回は小さな通過点にしかならないはずで、観光ビッグバンにどのように対応していくかが問題です。

急増する需要をキャッチし、時流に乗ってアジアの発展を関西の発展に取り込んでいくことが出来れば、空港は自ずと利用されるものになっていくと思います。

その意味で、関空の活性化はひとり関空会社が責めを負うのではなく、経済界、自治体、国が一丸となってアジアを取り込むことにこそ鍵があると申せましょう。

まずは、国にも協力していただいて関空の有利子負債を大幅に削減し、料金面での空港としてのハンデを克服すること、次に阪神間の自治体が、例えば関西広域機構のような場を使って大きな戦略を描き、物流インフラも含めた投資の重点化を図ること、さらに経済界が外国人を強く意識した新しいビジネスを生み出すとともに、中部・中四国などの財界とも連携し幅広い選択肢を提供するなどしてアジアからの顧客を惹き付けること、が求められていると思います。

関西経済同友会は、昨年8月2日、第2滑走路オープンに合わせ、この滑走路から飛び立つ一番機で中国にミッションを出しました。それからほぼ1年に当たる本年8月8日、北京でオリンピックが開幕します。いまさらながらに時の廻り合わせを感じるとともに、この「時」を逃す手はないと痛感する次第です。協力して頑張りたいたいものです。